
硝子の心

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

硝子の心

【Nコード】

N5019I

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

高梨清音は無神経なところのある、それでいて心の脆い女の子だった。ある日クラスメイトを何気ない一言で傷付けたことを皆に責められてそれにショックを受けて逃げたが。こうした人は結構多いと思います。

第一章

硝子の心

高梨清香は高校生だ。背が高く髪は黒のロングヘアである。顔は細長く垂れ目である。その垂れ目がとにかく目立っている女の子だ。学校の中では明るい女の子と言われている。しかし友人達の間では今一つ困ったところがあるとされていた。そしてそれには理由があった。

「あの娘またなの？」

「そう、またなの」

女の子達が困った顔で廊下で話をしていた。

「休むって。学校」

「今度は何が原因なのよ」

「何でもね」

その原因について話されるのであった。

「あれらしいわ。昨日江里子と言い合ってたじゃない」

「ああ。あれ？」

「あれって清香が悪かったんじゃないの？」

皆はそれを聞いて言うのであった。

「あの娘が江里子に言ったんじゃない。イヤリングがどうとかってそれだけだね。ほら、江里子って」

その江里子という女の子についても話される。

「気が強いじゃない。それもかなり」

「まあ確かにね」

「あの娘はね」

「それでね。ついつい言い過ぎて」

こうしたことは非常によくあることではある。女の子の世界だけに限ったことではない。

「それで。清香言われてすぐに泣き出して」

「それで、なのね」

「そうなの。それでなのよ」
こう話されるのだった。

「大泣きしてその場から逃げて」

「学校休んでるのね」

「いつもみたいにね」

これがいつもだとも話された。

「今頃また自分の部屋で落ち込んでるわよ」

「やれやれね」

皆それを聞いて溜息をつくのだった。本当はつきたくはなかったがそれでもつかざるを得なかった。そんな清香のことを考えるとであつた。

「いつものこととはいえね」

「あんなので大丈夫なのかしら」

「さあ」

そのことについて誰も確かに言うことはできなかった。

「何か言われたらすぐに落ち込んでばかりだし」

「普段は鬱陶しい位にお喋りなのにな」

これが清香だった。普段はとにかく口やかましい普通の女の子なのだ。しかし一旦落ち込むとそのまま何処までも落ち込んでいく。

この辺りが実に厄介なのだ。

「自分が悪いことでも何か言われたら落ち込んで」

「しかも何処までも沈んでいくし」

所謂波が激しいのである。

「あれじゃあ。ちよつとねえ」

「せめてある程度で止まってくれないと」

皆そんな彼女のことに呆れていてそれでいて心配だったのだ。実際にこの日彼女は自分の部屋の中に引き籠もっていた。ベッドの中に寝たまま起き上がろうとはしない。

「ねえ清香」

部屋の扉の向こうから呼び掛ける声がした。

「大丈夫なの？」

母の声だ。だが清香は返事をしない。

「御飯。ここに置いておくからね」

やはり返事をしない。御飯はそのまま扉の前に置かれた。清香はそれはわかったがやはりベッドの中から起き上がるうとはしなかった。その日はそのまま一日を過ごしてしまったのだった。

その日の夜もベッドから出ようとはしない。母は結局御飯に一切手をつかなかった娘を心配した。しかしそんな母に夫である清香の父が言うのだった。

「放っておくしかないな、それは」

「またそつとしておくしかないっていうの？」

「言ってもな」

こう言って首を振る父だった。

「どうしようもないからな、清香にはな」

「そつなのよねあ」

母も溜息と一緒に言うのだった。

「昔から。何かあったらすぐに落ち込んで」

「暫く起き上がるまではな。そつとしておこう」

「わかったわ。けれど」

母はここでまた溜息を吐き出した。

「大丈夫なのかしら、これで」

「生きていけるかどうか」

「そうよ。あんなに気が弱くて」

清香の友人達と同じことを心配しているのだった。これは母親だけあって彼女達のそれと比べてもかなりのものであった。実の娘のことだからだ。

「これから。本当に」

「どうにかなくてもらうしかないな」

父も心配する顔であった。

「あいつにはな。けれどな」

「昔からのよね」

また困った顔を見せる母だった。

「本当にね」

「そうだな。どうしたものかな」

「せめて。ある程度で落ち込むのを止まってしまつて」

母の言葉はここでも清香の友人達と同じことを言っていた。

第二章

「そうしてもらったらいけれど」

「どうにかなって欲しいな」

「ええ」

また困った顔で話し合うのだった。

「このままじゃ。清香にとってもよくないし」

「どうにかしないといけないんだがな」

しかしどうにもできない状況なのだった。両親も清香を本当に心配していた。しかしそれは思うようにはならないのだった。この時は結局何とか一日で起き上がることができたのだった。しかし学校に通えるようになるのもう一日かかってしまったのであった。

「やっと来たわね」

「そうね」

「二日ね」

一日はベッドの中で。そして残り一日は家の中で。それぞれ過ごしたうえで何とか学校に帰ることができたのである。しかし表情はまだ晴れはしていなかった。

「けれど。あの顔じゃ」

「なのよねえ」

「物凄く暗いし」

俯いた顔で通学する清音を見ての言葉である。

「あんなのじゃ。本当に」

「またちよつとしたらよね」

皆そのことはよくわかっていなのだった。清音のそのことは。彼女はとりあえず学校に通うことはできるようになった。だが進歩は何もなかった。

相変わらず何か言われたり嫌なことがあればそれで壊れてしまい逃げ出そうとする。その繰り返しである。だがそんな彼女にも転

機が訪れることになった。

学年が進級しての隣の席。そこにいたのは。

「宜しくね」

「あつ、確か」

この時の清香は普段の清香だった。明るい清香である。

「静香ちゃんよね」

「そうだよ」

見ればふつくらとした頬で黒髪を頭の上で団子にしている。目は少し垂れ目でにこにことしている。全体的に童顔だが胸は制服の上からでもはつきりとわかる。そんな女の子だった。

「多摩川静香。宜しくね」

「うん。私高梨清香」

清香も自分から名乗った。その声はやはり明るい。

「宜しくね」

「確か一緒のクラスになったのはじめてよね」

「そうだったね。中学校から一緒だったのに」

静香もにこにこ笑って話す。

「今までずっとクラスは別だったよね」

「どうしてかな」

清香はこのことが気になりだした。ついつい首を捻ってしまった。

「今やっと同じクラスなんて」

「縁じゃないの？」

静香はあっけらかんとした調子で清香に返した。

「やっぱりこういうのって」

「縁なの」

「だってさ。一緒のクラスになるのってある程度運じゃない」

「そうね」

言われてみればその通りだと納得する清香だった。確かに成績やそうしたこととも関係するがそれ以上に運という要素が関係するの事実であった。

「確かにね」

「だから。縁なのよ」

そのあつけらかんとした調子を続ける静香だった。

「その縁を神様に感謝してね」

「神様って」

神様という言葉を聞くと少し戸惑った顔になる清香だった。

「そこまでするのかしら」

「なるわよ。それでね」

「ええ」

「今日何処に行くの？」

いきなりこう提案する静香だった。

「ねえ。何処に行くの？」

「何処につて」

「だから。折角同じクラスになったんじゃない」

その垂れ目を能天気にならわせた静香だった。如何にもといった感じの能天気な表情であったがそれが清香の目に強く入ったのも事実であった。

「何処かに行こうよ」

「ううん、何処かにつて」

「カラオケなんてどう？」

戸惑ったままの清香にこう提案してきた。

第三章

「カラオケ。どう？」

「カラオケ？」

「そうよ。皆と一緒に？それとも二人で行く？」

「皆でつて言われても」

今はそうした気持ちにはあまりなれなかった。今一つ浮かない顔で静香に返す。

「それはあまり」

「じゃあ二人で行くのね」

「え、ええ」

完全に静香のペースに入れられてしまいその中で応えた。

「それじゃあ二人でね」

「行こう。駅前のあのお店でいいわよね」

「まあお店は何処でも」

正直なところ今一つ行く気にはなっていない。しかしそれでも静香の言葉に應えて頷く。暗い気持ちはあったがそれでも相手のペイスに入れられてしまっていた。

「いいけれど」

「あそこハイパージョイ多いからいいのよね」

「ハイパージョイ好きなの」

「あとセガも好きよ」

カラオケの機種の話もにこにこ話す静香だった。

「まあダムも好きだけれど」

「何よ、それ」

静香の今の言葉を聞いて思わず笑ってしまった清音だった。ここでやっと少し笑顔になった。

「結局何でも好きなんじゃないの？」

「そうかも」

笑顔でそれを否定せずに受け止める静香だった。

「私結局あれなのよ」

「あれって？」

「歌、好きなのよ」

こう話すのだった。

「歌うのも聴くのも。大好きなのよ」

「そう。大好きなの」

「そうよ。だから機種はね」

「ええ」

「結局あれね。何でもいいのよ」

またこう話すのであった。

「何でも。それじゃあ今日の放課後二人でね」

「わかったわ」

今度は先程よりも少し明るい笑顔で頷くことができた清音だった。

「じゃあ放課後二人でね」

「行こうね」

こうして二人でカラオケに行くことになった。入った店はその駅前のお店であった。暗い個室の中には壁にそのまま付けられたソファがある。二人は並んでそこに座った。そのうえで頼んだアイステイーを飲みながら曲を入れていく。曲は静香がどんどん入れていた。

「えっ、もうこんなに入れたの？」

「うん、清音ちゃんも歌うよね」

「まあそうだけれど」

カラオケに入れば歌う、清音もそれは同じだ。しかし今彼女が戸惑った理由はそれではなかった。何と静香は気付けば十曲も入れてしまっていたのだ。

「しかもこの曲ってどれも」

「どうしたの？」

「何かあれね」

画面に出ているその曲達のタイトルを見ての言葉だった。

「どれもやたらと元気が出そうな曲ばかりね」

「そうでしょ？私こうした曲が大好きなのよ」

にこりと笑って隣にいる清音に話す静香だった。

「明るい曲がね」

「それでこうした曲入れたの」

「まだどんどん入れるわよ」

しかもこれに留まらないというのである。

「もう何十曲もね」

「そんなに入れるの」

「清音ちゃんもそういう曲好きよね」

そのにこりとした、やはり能天気なものを強く感じさせる笑みで清音に問うてきた。

「どうなの？やっぱりそうよね」

「そうね」

自分の本音は隠して頷く清音だった。

「どちらかっていうとね」

「そう。じゃあ決まりね」

清音のその言葉を聞いてさらに明るい笑みになった静香だった。

第四章

「まずは私が歌ってね」

「うん」

「次は清音ちゃんね」

「かわりばんこで歌うのね」

「だから。二人じゃない」

当然だと言わんばかりの口調であった。

「それはやっぱりね。二人だとね」

「そう。だからなのね」

「そうよ。二人でね」

また話す静香だった。

「かわりばんこで歌おうよ」

「じゃあまずは静香ちゃんが慎吾ママで」

「清音ちゃんがTOMORROWね」

どちらも確かに明るい曲である。とりわけTOMORROWはそうであった。

「涙の数だけ強くなろうよってね」

「そう。涙の数だけね」

「いい曲よね」

涙と聞いて微妙な顔になった清音にまた明るい声をかけるのだった。その明るい声と同じように明るい表情もそこに見せてもいた。

「強くなるってね」

「強くな」

「そうよ。だから歌おうよ」

やはり明るい声であった。部屋の中の照明よりも遥かに明るいものだった。

「この曲ね」

「わかったわ。それじゃあ」

「後でデユオも入れて」

言いながらもうそうした曲も入れてしまっている静香だった。

「明るく楽しもうよ」

「明るく楽しくね」

「折角生きてるんだから落ち込んでも仕方ないよ」

能天気なまでに眩い言葉が続く。

「そうでしょ？だからね」

「うん」

何とかその目まで笑うことができた。そうして彼女の歌を歌うことができた。その日は二人で何処までも歌った。これは二人の付き合いのはじまりであった。

二人はいつも一緒にいるようになった。そうして清音が何かですぐに落ち込みそうになると。

「ねえ清音ちゃん」

「あつ、うん」

すぐに静香が側に来て。笑顔で彼女に声をかけるのであった。

「今のはね。やっぱり清音ちゃんが悪いよ」

「私が悪いのね」

「そうよ。悪いよ」

この静香の言葉を聞いて皆は。思わず強張った。清香がそんなことを言われればどうなるか、それをよく知っていたからである。

それでその強張った顔で二人のやり取りを見守った。とりあえず何が起こつてもおかしくはない、それを心の中で念じながら見守る事になった。

その皆が見守る中で。静香はまた清香に言うのだった。

「あんなこと言ったら駄目だよ」

「駄目って？」

「あの娘が怒るのも当たり前よ」

笑顔だったが言葉は少し厳しいものだった。

「気にしてることなんだから」

「けれど私は」

「言ったら駄目だから」

あくまで清香が悪いというのだった。

「もう絶対にね。言ったら駄目よ」

「私だって言われたし」

「それでもよ」

静香は逃げようとする清香にまた言った。皆そんな彼女の言葉を聞いていよいよとんでもないことになる内心ヒヤヒヤしていた。

そしてそれを何とか隠しながら。なおも二人のやり取りを見守るのだった。

「どうなるのかな」

「あんなこと言ったらそれこそ」

心の中の言葉は皆こうしたものだだった。とにかくどうなるのか、それが不安だった。

しかし静香だけは明るい顔であった。言葉の内容は真面目だったが決して怒ったものではなかった。その顔でさらに清香に言うのであった。

「あれは言ったら駄目なの。これから絶対に言ったら駄目だよ」
「うん」

清香もここで頷いた。静香の言葉に対して。

「わかったわ。それじゃあ」

「わかってくれたらいいよ」

そしてここできりと笑う静香だった。

第五章

「それじゃあね。行こうよ」

「行こうよって？」

「もうお昼じゃない」

そのにこりとした笑みでまた清香に話した。

「だから。食べに行こう」

「あつ、そうね」

言われてそのことを思い出す清香だった。確かにもうそんな時間だった。思い出せば自然とお腹も空いてきた。身体は自然であった。

「それじゃあ。食堂で」

「おうどん食べよう」

清香はにこにことしてまた清香に言ってきた。

「それでいいわよね。おうどんで」

「うん。じゃあ」

「鴨なんばうどんに親子丼ね」

丼もなのだった。

「私それがいいわ」

「じゃあ私はきつねうどんにかきあげ丼かしら」

清香は気付いていなかったがもういつも通りの顔になっていた。

明るい顔で陽気に静香と話している。もうさっきまでの落ち込んだものは完全に消えていた。

「その二つね」

「きつねにかきあげね。それもいい組み合わせね」

「静香はあれなのね。鶏づくしね」

「私鶏好きなのよ」

だからだというのである。

「清香も好きよね、鶏」

「ええ、まあね」

完全に静香と同じ表情になって言葉を返していた。

「味も好きだしカロリーも少ないし」

「そうなのよ。ダイエットにいいから」

話は今度は如何にも女の子らしい話になっていた。女の子ならばどうしてもスタイルのことを意識しなくてはならない。当然ながら静香も女の子なのだ。

「だから余計にね」

「鶏なのね」

「そうなのよ。だからなのよ」

やはりこれであつた。

「だから鶏なのよ」

「私にもかきあげ止めようかしら」

そして勿論清香も女の子である。ならばこう考えるのも自然な流れであつた。

「太るし」

「じゃあ何にするの？」

「玉子丼かしら」

それにしようかというのである。

「やっぱり」

「いいんじゃない？それで」

清香も清香のその考えに賛成した。

「じゃあまずは何につけても」

「そうね。食堂に行つて」

「食べましょう」

こうして二人で仲良くかつ明るく食堂に向かうのだった。そこにはもう先程までの落ち込んだ清香はいなかった。皆そんな彼女を見て言つのだつた。

「なあ、ひよつとして」

「ああ、そうだな」

「そうね」

それぞれお弁当やパンを食べながら話をはじめていた。

「静香ってひよっとして」

「高梨のことわかってるのか？」

「だよな、あれは」

真剣な顔で話をしていた。食べながらであるが。

「それで注意するのと同時に励まして」

「気持ちを落ち着かせたのね」

「今までの清香だったら」

ここで皆これまでの彼女のことを思い出すのだった。何か言われればもうそれだけでどこまでも落ち込んでしまう彼女のことをだ。

「あれでもう泣きながら早退するのに」

「それを止めるなんてな」

「やり手？」

静香への評価である。

「静香ってひよっとして」

「そうかもな」

「あれはね」

皆今は教室にいない彼女のことをこう評価しだしていた。

「とにかく高梨は落ち込まないで済んだな」

「あの娘のおかげでね」

それは確かだった。彼女はいつものように落ち込むことなく話は奇麗に収まった。それだけは確かであった。そしてこれはこの時だけではなかった。

第六章

清香に何かあるとすぐに静香が出て来て叱ったり励ましたりする。そうしてそれまでは何かあるとすぐに引っ込んでしまう清香が落ち込まなくなった。これは確かであった。

また清香自身も変わってきていた。まずは。

「御免」

「あつ、うん」

クラスメイトの一人と衝突しようとした時だ。清香は相手に頭を下げたのだ。

「今のは私が悪かったわ」

「ま、まあそうだけれど」

相手の女の子は謝罪する彼女を前にして少し戸惑っていた。

「わかってくれたらね」

「わかってくれたら？」

「それでいいわ」

「それでいいの」

「だって。わかってくれたんでしょ？」

彼女は笑顔で清音に話した。

「だったらそれでいいわ」

「そうなの」

これには清音も驚いていた。まさかこんなにあっさりと話が終わると思っていなかったからだ。彼女はいつも騒動を長引かせていたからである。

「これで」

「終わりよ。じゃあ仲直りしましょう」

「え、ええ」

最後は指きりげんまんだった。これが仲直りになった。この他にも彼女があっさりと謝ったことで騒動が収まったりしたことがあっ

た。それに何より彼女が起すトラブルが減ってきていたのだ。

「何でかしら」

「何でかって？」

学校の屋上だった。今日清音は静香と二人でこの屋上でお昼を食べていた。学校の売店でパンと牛乳を買いそれを食べているのだ。た。

その中で彼女は不意に。こんな言葉を出したのである。それで静香は彼女のその言葉を聞いて条件反射的に問い返したのである。

「何かあったの？」

「最近何かトラブルが少なくなったのよ」

このことを彼女に話すのだった。

「それに学校を休むこともしなくなったし」

「そういえばいつも学校に来てるわよね」

「前は。そんなふうじゃなかったから」

かつての自分のことも話すのだった。

「何かあったらすぐに学校休んでたし」

「誰かに何かを言われてね」

「それだけで駄目だったから」

それがかつての彼女だったのだ。何か言われるとすぐに落ち込んでしまう。例えばそれが自分が原因だったとしてもそれでもである。

「前は」

「変わったからよ」

静香は清音のその言葉を聞いてそのうえで答えた。

「清香ちゃんが変わったからよ」

「学校を休まなくなったのは？」

「そうよ。それ以前に他の人と衝突することも少なくなったわよね」

「ええ」

それもその通りだった。確かにそういしたことがかなり減っていたのだ。

「それはそうだけれど」

「だからよ。変わったからよ」

「私が変わったからなの」

戸惑った顔で静香のその言葉を聞くのだった。

「だからなの」

「そうよ。だからそういうことがなくなったし減ったのよ」

だからだというのだった。

「それっていいことよ」

「いいことなの」

「清香ちゃん、他の人に色々と言わなくなったわよね」

このことも言う静香だった。

「前は違ったわよね、確か」

「そうね」

それはその通りだった。今までは何も考えることなく他人の気にすることを言っていた。そうして傷付けて逆に言われて落ち込んだりしてきたのである。

「それはその通りよ」

「まず誰かに何かを言わなくなつて」

最初はそれだというのだった。

第七章

「だからトラブルが減ったのよ」

「そうだったの」

「そうよ、まずはそれよ」

「それだというのだった。」

「だから学校も休まなくなっただけ」

「それでトラブルが減ったから」

「そういうこと。それに」

「それに？」

「言われて痛かったでしょ」

「静香が次に言ったのはこのことだった。」

「自分が言われてきた。痛かったよね」

「ええ、それはね」

「静香のこの言葉には頷くしかなかった。その通りだった。」

「けれど自分が言ってきたことには」

「気付かなかったわ」

「ここでもその通りだった。まさに、であった。」

「それは」

「けれど今は違うわよね」

「わかったわ」

「返答は一言だった。」

「その痛さが。本当に」

「わかったからよ。だから言わなくなったのよ」

「だからだというのであった。静香は。」

「清香ちゃんはね」

「正直言っただけ」

「清香は静香のその言葉を受けて。俯いたまま答えたのだった。今まで気付かなかったわ」

「今気付いたのね」

「静香ちゃんと同じクラスになってから
それからだというのだった。」

「それから気付いたのよ」

「私と一緒にのクラスになってから」

「静香ちゃん言ってくれるじゃない」

今度は静香に顔を向けての言葉だった。もう俯いてはいない。

「私が悪かったら悪いって」

「ええ」

「それで気付いたのよ」

そういう意味で静香のおかげだというのである。清音は。

「私。やっとな」

「そうだったの」

「そうよ。有り難う」

にこりと優しい笑みを浮かべての言葉だった。

「静香ちゃんがいてくれたから私わかったのよ」

「私がいてくれたから」

「それで変わったのよ。本当に有り難うね」

「御礼なんかいいわよ」

静香は清音のその言葉を受けて照れ臭そうな笑みで返した。

「そんなの。全然ね」

「いいの？」

「いいわよ」

やはりこう言うのだった。

「そんなの。全然」

「そうなの」

「だって友達じゃない」

いつもの明るい笑顔での言葉だった。

「そうでしょ？私達友達でしょ？」

「ええ」

「だったらいいわよ」

またいい、と言う静香だった。

「そんなの気にしなくてもね」

「そういうもののなの」

「私だって」

静香もまた言ってきた。

「清音ちゃん見ていて自分もこうしなきゃ、って思うところあるし私に？」

こう言われたのは清音にとって意外なことだった。言われたその瞬間に顔をきよんとさせてそのままになってしまった程である。

「私につて」

「お勉強でもスポーツでも頑張ってるじゃない」
清音にまず言うのはこのことだった。

「それで何でも皆に教えてあげてるわよね」

「そのこと？」

「そのことよ。そんなの滅多にはできないわ」

このことを清音自身に話すのだった。

「それが凄いと思うわ」

「そうなの」

「そうよ。だからお互いにね」
にこりとした笑みを清音に見せる。

「やっていきましょう、二人でね」

「ええ。そうね」

清音も静香のその言葉に頷いた。

「それじゃあ静香ちゃん」

「うん、清音ちゃん」

「これから宜しくね」

「私もね」

今は笑顔で頷くことができた二人だった。確かに清音はまだ何かと問題はあった。だが少しずつ静香と共に。そういったものをなお

していこうとこの屋上で思っのだった。彼女の横で。

硝子の心 完

2009・8・2

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5019i/>

硝子の心

2010年10月8日15時26分発行